

### ジョイスの時代のダブリン(2)

YUKI, Hideo / 結城, 英雄

---

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

53

(開始ページ / Start Page)

43

(終了ページ / End Page)

55

(発行年 / Year)

2006-10-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004044>

## ジョイスの時代のダブリン(2)

結 城 英 雄

### 家庭生活

#### ブルーム一家の朝

ダブリン市内エクルズ通り7番地のレオポルド・ブルーム宅に目を転ずると、1904年6月16日の午前8時、半地下の台所で、夫ブルームが喪服を着たまま朝食の用意をしている。彼の一日の始まりである。メニューはバターつきパン四きれと紅茶。が、これは寝ている妻モリーのための朝食で、彼の好物は獣や鳥の内蔵だ。石炭が赤々と燃えている暖炉に湯わかしをかけ、近くの肉屋に買物に出かけることにする。

彼はオローク酒場の前を通り、公立小学校の生徒の声に耳を傾け、その先の肉屋に入る。ソーセージを注文している隣家のメイドを意識しながら、目当ての腎臓を一つ買う。3ペンス。支払いを済ませ、店にあった新聞の切れはしを読みながら、来た道を引き返す。何となく気分がすぐれないが、寝起きが悪かったのかもしれない。そこで妻のいる家の暖かさを思い描き帰路を急ぐ。だが家に戻ってみると、何と玄関には……。

彼が玄関で目にしたのは妻への愛人からの手紙であった。心穏やかではないが、彼は妻の朝食を寝室に運んだ後、台所に戻り、独りで豚の腎臓のグリル、パン、紅茶という朝食をとる。どことなく不可解な家庭である。なぜブルームは妻のために朝食を用意するのか、なぜ妻と別々に朝食をとるのか、そもそもなぜ妻の愛人が留守宅にやって来ることを知りながら何らかの対策を講じないのか。彼は屋外便所で用を済ませ、帰宅が遅いことを妻にほめかして家を出る。友人の葬儀に参列し、広告取りの仕事に励み、街を放浪し、帰宅は午前1時。妻への想いに捕われながらも、家に戻ることにためらいを覚えた結果である。

ブルーム夫婦の結婚生活も16年が経過し、二人の間には人知れぬ秘密があるらしい。そうした問題はいずれ女性の項目で扱うことにして、ひとまず、彼の家庭を中心とする中流家庭のダブリンの市民の生活環境を観察しておきたい。家庭=ミクロの世界が国家=マクロの世界と不可分であることも明らかになるであろう。両者は相互嵌入のイデオロギー装置である。1903年に起こったジョン・ミリントン・シングの『谷間の陰』上演騒動がそのよき事例である。年老いた夫との生活に背を向け家出するアイルランド版の『人形の家』であるが、民族主義者たちはアイルランドの女性を侮蔑しているとその物語に抗議した。アイルランドの女性たちは不幸な生活を送りながらも、国家のために忍従しているとの姿勢による。民族主義の高揚期、モリーの不義という家庭の問題も国家と無関係ではない。

同じく一家の生活様式から、被支配者であるアイルランド人と支配者のイギリス人とが相即不離の関係にある事も明らかになるだろう。食事につき物の紅茶を取り上げてもいい。紅茶は大英帝国の調達品であり、1773年のボストン・ティー・パーティ事件から推測できるように、紅茶を飲むことは民族主義運動と抵触する問題である。ブルーム一家にそうした自覚があるとは思えない。ブルームは社交欄に「レオポルド・ブルーム夫妻はキングズタウンから船でイングランドに向って御出発」(17.1614)と記載されることさえ夢想している。イギリス文化の浸透は根深い。民族主義を云々するにも家庭の状況を検証しておく必要がある。

### ブルームと家庭

実は、妻の不義に苛まれながらもブルームの6月16日の意識を支配しているのは家である。それはモリーを中心とした数々の思い出に満ちた幸福な空間であり、彼の意識はその家をめぐって展開している。家は彼がそこから出発し、そこへもどってゆく唯一の確固とした安らぎの中心である。彼は肉屋への早朝の外出の折にも、家庭の暖かさをこう喚起している。「お茶のなごやかな湯気と、鍋に沸きたつバターの匂いを吸いこめば。彼女のふくよかなベッドで暖まったからだのそばで。それなんだよ、それ」(4.237)。

ブルームが求めているのは、避難所としての家である。それは家というより家庭(マイホーム)と呼ぶべきかもしれない。家庭とは、要するに、男=職場、女=家という性の分業を前提に、仕事という生存競争の場で傷ついた夫が安らぎをうる場として中流階級が仮構した空間である。ブルームが憑かれているのも、そのような意味での家庭である。だからこそ、彼の思い描く家庭には数々の幸福な記憶が同伴している。たとえば、彼の心を去来するのは、モリーとの初めての逢引き、息子ルーディが懐妊されたときのこと、ある冬の夜の性行為、娘ミリーにまつわる微笑ましい光景などである。彼の家庭への愛着は、机の引き出しに忍ばせてある養老保険、国庫債券、墓地購入の領収書などが物語っている。それらは家族の将来への彼の配慮である。彼にとって何より大切なのは「家庭生活」(16.1177)だからである。

ヴィクトリア女王治世の間、イギリスは自由放任主義を原則とし、各個人の自助(セルフヘルプ)の精神を頼りに未曾有の経済発展を遂げた。その論理を支持し、その恩恵に最もあずかったのが中流階級であった。彼らは法律、医学、銀行といった仕事に携わっていた。働かずして固定した家を持つ上流階級とも違い、また困窮している労働者とも異なり、自らの経済力を持ち生活空間も自由に選択できた。それは往々にして郊外住宅という形を取り、職住一致から職住分離の生活形態を生み出した。そうした状況下においては、家は仕事からの避難所、つまり癒しの空間としての意味を帯びてくる。家庭(マイホーム)の始まりである。こうして男は仕事、女は天使という性の分業が定着する。共通する倫理は勤勉、礼節、儉約などであり、それを遵守することが中流階級の体面となった。家庭とは資本主義とキリスト教の申し子である。

この趨勢は同じ大英帝国内にあるアイルランドの中流にも軌を一にして広まった。当初、中流階級の

主流はプロテスタントであったが、彼らの考えは同様の職業の、さらにはその下の層のカトリックの中流階級にも浸透していった。『ダブリンの市民』の最後の物語、「死者たち」の主人公である大学教師のゲイブリエルは、カトリックでありながらプロテスタントの多いダブリン南郊のモンクスタウンに住み、妻と二人の子供に囲まれた空間に自己の安らぎを見出だしている。彼の家庭に対する意識はブルームのそれと少しも変わらない。伊達男と呼ばれるレネハンでさえも、市内を放浪しながら、暖かい暖炉のそばで夕食をとることを夢みている（「二人の伊達男」）。

その一方、男が思うほど女たちは家庭生活に満足していない。マイホームとは女性にとり自由意志を奪われた獄舎であり、「レイディ」（主婦の敬称）とは名ばかりで、内実は体のいい家政婦にすぎない。そう感じている女性は多く、ミセス・カーナンもその一人である。彼女はいまだに結婚式のことを楽しい心でまざまざと思い出しながらも、結婚三週間後には妻の生活にうんざりし、それから我慢ができなくなりかけたときには母親になり、以来25年のあいだ、夫のために家庭をきりもりしてきた（「恩寵」）。惰性の人生である。

モリーの状況も大同小異かもしれない。彼女も「不しきみみたいな話よあんなにつめたい彼といっしょにくらしながらあたしがまだしわくちゃばあさんにならないなんて」（18.1399-1400）と考えている。そのため彼女は、一方で「やれやれ死んでおはかの中に横になったらゆっくりできるでしょう」（18.1103-4）と諦め、他方で「ああたすけてよこんなことからあたしをふん」（18.1128-9）と脱出願望を抱く。ブルームは「自ぶんが知らないことはないと思いきこんでいる」（18.281-2）が、彼女にもそれなりの不満がある。

## 家 計 簿

モリーの不満の一つは家計にある。広告取りとしてのブルームの収入は歩合制で、金額も不安定である。6月1日に小切手を受け取り、本日6月16日に1ポンド7シリング6ペンスもらい、近々プレスコット染め物店とキーズの広告で5ポンド6シリングの収入が見込まれている。月の手取りは10ポンドほど、年収にして約100ポンドというところだろう。その収入で家賃、食費、被服費、光熱費、娯楽費、家政婦の賃金、積立金などを賄わねばならない。歌手としての妻の収入もほとんど無きに等しい。

こうした経済事情を背景に、ブルームは金に細かく儉約家である。モリーは不平たらたら身の不遇を嘆いている。

あたしはいつもお茶を1つかみポットに入れたいのに彼はもっともらしくスプーンではかってあたしがどた靴を買って来てもそのおニューの靴はぐあいがいいかい yes ところでいくらしたんだあたしもう着るものがないわ茶いろい服とスカートとジャケットのくみ合わせそれから洗たく屋にだしてあるのと3つしかどんな女だってがまんできるかしら……彼フリーマンなんかやめてしまえばいいのにけちなはした金しかくれないんだからあんなとこやめてしまってオフィスか何かにつとめればきまった給りょうがもらえる（18.468-505）。

ブルームの収入が特別少ないわけではない。養老保険 500 ポンド、国庫債券 900 ポンド、預金 18 ポンド 14 シリングの預金など、不測の事態に備えた資産もある。中流の下層の平均以上である。一般的には、年収 1,000 ポンド以上が中流の上層、700 ポンドから 160 ポンドが中流の中層から下層、それ以下が労働者階級ということになる。しかしながら、この基準は少々高めで、実際には中流の下層は 100 ポンド前後、労働者階級で 50 ポンド前後ではなかろうか。判事 3,500 ポンド、上級の役人 2,000 ポンド、トリニティ・コレッジの教授 1,500 ポンド、法廷弁護士 1,000 ポンド、郵便局員 100 ポンド、店員 60 ポンドといった時代である。

100 ポンドが現在の日本円でどれくらいに相当するかの換算は難しい。時代や文化の違いに応じ異なる基準がある。参考までに当時の二つの家計簿を示しておくことにしたい。以下の表 1 は子供 3~4 人、召使 1 人、年収 300 ポンドの中流の中層の家計簿、表 2 は家族 5 人、年収 65 ポンドの労働者階級の家計簿である。

表 1 1900 年頃の中流家庭の家計簿

	£	%
食 費	90	30
被 服 費	51	17
家 賃	37	12.5
光 熱 費	13	4.5
召使一人の雇用費	25	8
賃 金	9	
賄い費用	16	
貯 金	24	8
税 金	12	4
医 療 費	12	4
交 通 費	12	4
娛 楽 費	15	5
修 繕 費	9	3

表 2 1900 年頃の低所得層の家計簿

	£	%
食 費	40	63
家 賃	12	17
被 服 費	13	20
光 熱 費		
互助会費		
質屋への利子		

二つの家計簿はエンゲルの法則そのまま、所得が増加するにつれて、家計支出に占める食費が減少することを示している。ブルームの家の生活は、どちらかと言うと労働者階級の家計簿に近い。モリーによると、「みんな食費と家ちんに消えてしまう」(18.467)。それでも労働者階級とは違い、多少のゆとりがある。この日、ブルームはディグナムの遺児のために5シリング寄付し、モリーも一本足の水兵に1ペンス恵んでいる。さらにモリーは、2週間前の6月1日にガーター、化粧水、ハンカチ4枚を買ってもらい、近いうちに絹のベチコートも手に入れることだろう。そもそも、ブルームには経済観念があり、仲間うちで彼だけが貧乏人の「銀行」である質屋の世話になっていない。家族が少ないことも幸いしている。それに市民の大多数を占める労働者階級の人々の年収は50ポンド以下と言われており、今挙げた労働者階級の家計簿は同階級のうちでも上に位置している。

モリーが不満をもらすのは、価格の上昇に伴う生活の圧迫感に原因がある。19世紀の100年間、物価の変動がほとんどなかったが、それでも「近ごろはまい日ものの値だんが上がって」(18.474)というモリーの言葉通り、1895年からの10年間、約10パーセントの上昇が見られたのである。

### 住宅事情

住宅事情はどうであったのか。ブルームは肉屋からの帰り道、エクルズ通り80番地の窓に貼りつけてある不動産広告を目にし、「まだ借り手が見つからない。なぜだろう？ 評価額はたった28ポンドなのに」(4.235)とつぶやく。ダブリンの不動産評価額は賃貸料の年額で示され、毎年刊行される『トム編ダブリン市住所人名録』にすべて記載されていた。その1904年版によると、80番地は17ポンドで、ブルームの居住するエクルズ通り7番地は28ポンドであった。市の選挙権は評価額10ポンド以上の家に居住する21歳以上の男子に与えられ、彼も34,906人の有権者の一人でもある。

このブルームの家は三階建ての共同住宅の一部で、7番地は裏庭付きの5LDKとかなり広い。しかしながら、彼が借りているのは地下の台所、一階の応接間と寝室、二階の一室らしく、裏庭付きの2LDKかもしれない。そうであるなら、家賃は28ポンドの半額の14ポンドほどとなる。家賃は年収の約10パーセントが望ましいと言われており、14ポンドは彼に相応しい金額である。だが、それでも高いらしく、空き部屋となった娘の部屋の借り手をすかさず求め、「家具なし貸間あり」(10.250)の札を掲げている。「たった28ポンドなのに」という80番地の評価額をめぐる発言は、下宿人を置くことを念頭に置いてのことではなかろうか。

今日とは異なり、大多数の家庭は借家に住んでいた。住宅の価格がほとんど変動しなかったため、賃貸料が値上がりすることもなく、住宅を所有することによる利得もそれほど期待できなかった。空き家は十分あり、転居も簡単で、下宿人を置くこともできた。家族が増えて手狭になったためより良い住宅環境を求める人、あるいは逆に生計の都合でより安い住宅に移り住む人もいた。ブルームの家庭もユダヤ人居住区を振り出しに、リフィ川を境として、その南北をかなり頻繁に引っ越ししている。現在の住居もここ一年というところではなかろうか。不動産業者の仲介、引っ越し業者との打ち合せ、入居に際しての清めの塩撒きなど一家の得意業である。モリーは結婚16年を回想し、うだつの上からない夫に

不満そうである。

あたしたちここにこうして16年たってもちっともうだつが上がらなくてあたしたちなんべん引っこしをしたかしらねぜんぶでレイモンド台町とオンタリオテラスとロンバードどおりとホリスどおりとそして彼はまたもやにげ出すは目になるといつも口ぶえをふきつづけおとくいのユグノーとかかえるのマーチとか家具を4コはこぶ男たちの手つだいをしながらそしてシティアームズホテル(18.1215-20)。

居住地から階級や宗派もわかった。市内のメリオン広場やフィッツウィリアム広場周辺に上流・中流の上層が群がっていたとすれば、グランド運河に接するハディントン道路沿いには最も豊かなカトリックが集まり、南環状道路の近辺にはユダヤ人の居住地「小さなエルサレム」があり、郊外のモンクスタウン、クロンターフ、ペンブルックにはそれぞれ裕福なクエーカー教徒、メソジスト派教徒、英国国教会教徒が多かった。特に郊外の新興住宅地の場合には、通りの名前も住人の指標になっていた。その一方、市内にはスラムと呼ばれる地区もリフィ川の南北にできていた。北ではムーア通り西からリネンホール兵営や北ブランズウィック通りをへて河岸近くのオーモンド市場まで、南ではクームや特別区あたりからクライスト教会大聖堂にいたる一帯がそうである。その他にも、かつて貴族の館のあったヘンリエッタ通り（「小さな雲」）、港に接する「ブレイディ共同住宅」(5.5)などもスラム化していた。

一般的に、リフィ川北側や市内には貧しいカトリック教徒が、リフィ川南側や郊外には豊かなプロテスタントが、それぞれ居住していたと言われている。これは経済的にも余裕のあるプロテスタントが18世紀中ごろ北から南へと、さらに19世紀中ごろ市内から郊外へと移り住み、貧しいカトリックが後に残されたことによる。特に1860年以降、郊外住宅が人気を呼び、中流のカトリックも追随するかのようになり郊外住宅を求めた。こうして19世紀末には、南北の環状道路を越えてペンブルック、ラスマインズ、ドラムコンドラへと、さらに海岸沿いでは北のクロンターフから南はモンクスタウン、キングズタウン、ブレイあたりまで赤煉瓦のモダンな新興住宅が広がった。これらの住宅はヴィクトリア朝住宅と呼ばれていた。「アイルランドの麻痺のまさしく化身と思われた」(『スティーヴン・ヒーロー』)、茶色の煉瓦のジョージ朝住宅とは対照的であった。

郊外住宅の人気にはいくつか理由がある。健康的であり、市内よりも税が少なく、電車や自転車の普及により市内への通勤が便利になったこと、また何よりも市内の喧騒を離れ同じ階級の集まる快適な空間であったことなどが挙げられる。そしてこれらの根底にあるのが中流階級の出現である。いずれも相応の経済力を持ち、妻を働かせる必要もなく、職場から離れた郊外に生活空間を選択できたのである。その数は決して多くはないが、自らのアイデンティティに意識的で、ラスマインズやペンブルックなど、1930年にいたるまで市との併合を拒んでいた。

ブルームはこうした波に乗れないようだが、まったく手が届かないわけではない。郊外住宅といってもほとんどが借家で、大手資本家や個別の投資家が購入し賃貸していたのである。堅実な彼のこと、家

賃が収入に余りあると考えたか、環境に馴染めないと思ったのだろう。それに今の住居での不満は、近所の子供のピアノの練習や隣家の目覚まし時計の音がうるさいことくらいだ。モリーなど「あたしのへやがほしいおならをするための」(18.906)と言いつつも、「こんな大きな兵えいみたいな家に夜ひとりでいるのは好きじゃない」(18.978)と広すぎて不気味に思っている。

にもかかわらず、彼の意識にはアンビバレントな感情が共存している。一方で、彼は「フラワー館」(17.1580)と自称する二階建ての郊外住宅を夢想する。それは広々とした便利な居住空間であり、牧歌的な庭園がそれを取り巻いている。しかし他方で、彼はペンブルック道路沿いの閑静な住宅街などに住む、上流階級に憎しみを抱く。彼の感情はずばり上層への怨念(ルサンチマン)である。おそらくブルームの感情は中流の下層に共通するものであろう。総督、市裁判所判事、トリニティ・コレッジ学長といった上流には程遠いけれども、自分たちのすぐ上の層には到達できるかもしれないのである。そうした期待が彼に怨念を抱かせるのではなかろうか。

しかしながら、子供に残飯あさりをさせる親、サンドイッチマン、港湾労働者といった人々の生活を想起しておきたい。市内には茶色の煉瓦の家が並び、陰気な様相を湛えていただけではない。そこでは貧しい労働者がひしめきあっていた。1901年の統計によると、共同住宅の約22,000の部屋に約72,000人が住み、そのうち一部屋あたり三人以上居住している世帯は約13,000世帯、時とすると10人以上が一部屋に群がっていた。

## 設 備

設備も十分とは言えなかった。大きな成果は、ウィックロー山脈の水源を利用したヴァートリー水道の完成である。早くも1868年、市民全員に良質な水が供給されることになった。エクルズ通りの家の台所にも水道が設置され、ブルームは日々便利している。だが、諸設備はいまだ未発達の状態でもリーの不満も多い。

何より風呂が不十分であった。風呂の設備がある住宅は少なく、寝室か台所の暖炉の前で、お湯を桶に入れ体を洗っていた。海水浴をするか、市内のいくつかの洗濯兼用の浴場を使用するか、もしくは公園で子供を洗う貧困家庭もあった。ブルームの家にも風呂の設備はなく、彼は本日市内の浴場を使用する。タラ通りのダブリン市営公衆浴場は冷水で4ペンス(シャワーだけの二等は2ペンス)、レンスター通りのトルコ式温水浴場は1シリング6ペンスであった。ユダヤ人女性たちが月一回、生理の後にタラ通りの市営公衆浴場を使用し、その清潔好きが話題になったこともあるが、娘の侵入を気にしながら手袋で下を洗っているモリーには不満である。

便所も十分に設置されていなかった。裏庭の屋外便所か室内便器を使用して、定期的の下肥処理の男に裏路地から回収してもらっていた。ヴァートリー水道のおかげで水洗便所が設置されるようになったというが、それはあくまで恵まれた住宅での話である。劣悪な労働者の住宅では、共同の屋外便所が一つあるだけで、窓から路地などに尿や便を投げ捨てることも多く、汚物の山が一階の窓ほどになっているスラムもあった。ブルームの家では、朝方ブルームが立て付けの悪い屋外便所で排便をし、夜中にモ



リーが室内便器で排尿をし、「香料を入れ」(18.1144)、室内では「香」(4.315)を炊いている。尻拭きには新聞紙や雑誌が使用されていた。

水回りということでは意外と洗濯が重労働であった。主婦の健康を害する一番の原因であった。台所を使用し、石鹼で水洗いするか煮沸し、時とすると白さを引き立たせるための青味剤を入れ、洗濯用の皺伸ばし機で絞り、室内で乾燥させ、アイロンをかけるという一連の手順が必要であった。しかし、1865年ころには洗濯屋も誕生し、更正施設や修道院などでも請け負っていた。便利であったが、焦げ付を作られるだけでなく、盗難に会うこともあった。ブルームの家では自宅で洗うと同時に、洗濯屋に出すこともある。干す場所は台所である。モリーは、夫がスティーヴンを台所に招き入れたことを知り、「しゃくねえ洗たく日じゃなくてあたしの古ズロースがつかからぶらぶら陳れつされているのを見られたのに」(18.1095)とつぶやいている。

照明、暖房、台所なども重要な設備である。照明は蝋燭、石油ランプ、ガスなどで、電気は市内の有名ホテルなどごく一部で設置されていただけである。ブルームの家では蝋燭と石油ランプに頼っているが、ガスも照明の一部として玄関の扇窓などに利用され始めていた。暖房は石炭か泥炭を暖炉で燃やし、暖炉はかまどにも利用されていた。料理用の特別なレンジを持つ家庭もあったが、ブルームの家のような中流の下層の家庭では、暖炉に設置したレンジを利用していた。朝食の際にブルームが湯を湧かし、腎臓を焼き、モリーが昼食にポークチョップを調理するのも暖炉である。燃料の石炭は家の前の路上の石炭入れから半地下に搬入されていた。

家具調度品も欠かせない。貸家とはいえ、家具なしがほとんどであった。入居者が自分でカーテン、絨毯、テーブル、ベッドなどを設置しなければならなかった。家具屋で新品を買う場合、月賦にしても利子がつくこともなく、現金での支払いには割引もあった。古い家具は競買場、露天の店、古道具屋などで買えた。モリー持参のベッドも中古である。いずれにせよ、当時流通していた「家政読本」などでは、できる限り長持ちのする家具を購入し、簡単に買替をしてしまうことの無いよう説いていた。そして中流以上の家庭で常備しなくてはならないのがピアノやオルガンである。一家の団欒の印であった。ブルーム一家にも一台ピアノがある。

## 食 事

その一方、意外にも食事に対する不満は少ない。1904年6月16日のブルーム一家の食事を列挙してみよう。ブルームは8時半に自宅で朝食(豚の腎臓のグリル、パン、紅茶)、午後1時すぎにデイヴィ・バーン酒場で簡単な立食(ゴルゴンゾラ・チーズ・サンドイッチ、ブルゴーニュ・ワイン一杯)、午後4時ごろオーモンド・ホテルのレストランでの正餐(レバーとベイコンのフライ、林檎酒一杯)。妻のモリーは8時半に自宅で朝食(バターつきパン、紅茶)、昼食(ポークチョップ、紅茶)、愛人持参の夕食(瓶詰め肉、ポートワイン)。朝のパンを除いたブルームの食事代だけでも総計2シリング10ペンスで、年額では50ポンドを越える。夫婦ともども多少高めの日であったようだ。

ブルームは普段は家で、しかも妻の料理する食事を、とっていたのではなからうか。市内の職場近く

に住む中流の下層という社会的地位に明らかである。一般的に、一日で最もボリュームのあるディナーを夕にとるのが上流階級や中流の上層・中層で、昼にとるのが中流の下層以下であった。これは家が職場に近いかどうかと関係があった。郊外に住む上流階級や中流の上層・中層は、朝食、昼食、ティー（お茶を飲みながらの軽食）、晚餐という順で、市内に住む中流の下層以下の人々は朝食、昼食、正餐、ティーという順であった。食事時間は朝食午前7時半、昼食午後1時、正餐（ティー）午後4時、晚餐（ティー）午後7時ごろであった。

主食はパン、ベーコン、ジャガイモ、オートミールでイギリス本土とほとんど変わらなかったが、食事の内容は階級その他の事情により様々で、その人の指標でもあった。ブルームが昼に飲んだワインに鼻をつまむような上流階級、その日の食事にも事欠く労働者階級、思想的に菜食主義を守る神智学の信奉者、東欧出身のユダヤ人である父親の内蔵好みを受け継ぐブルームのような人もいたろう。そして外食する人のためには、お手ごろな店から、スティーヴンの一家が「なまやけ」（『肖像』）などと噂する、コーレスのような一流のフランス料理店までであった。飲み物も紅茶、ビール、ワイン、ウィスキーがあっただけでなく、それらの種類も豊富であった。

食材の入手方法も様々であった。パンやミルクは毎朝配達してくれた。ブルームの家でも、近くをポーランド社のパン配達車が通り、ハンロン牛乳店の配達人が牛乳を大瓶に入れてくれている。市内には果物や魚介類を売り回る行商人もいたし、各戸を回る御用聞きに注文するか、自分で小売店、専門店、露天などで買うこともできた。いずれにせよ、肉、魚、その他保存不可能な品はそのつど購入する必要があった。ただし、モリーがドルゴッシュ肉店のポークチョップを食べたために腸の不調を訴えているように、粗悪な品を売る要注意の店もあった。店に冷凍設備がなかったことも大きな原因である。

物価の安いのは二つの市場で、しかも品物も豊富であった。一つはリフィ川北のダブリン市果物野菜市場で、オーモンド・ホテルからすぐ近くのマイカン通り4-33番地にあった。1892年に果物野菜市場が、1897年には魚市場が開かれた。もう一つはリフィ川南のダブリン市南市場である。1881年に南グレイト・ジョージ通りに開設された。多くの小売店の寄り合い所帯で、1892年には火災に見舞われたこともある。

食材も豊かになっていた。流通機構の発展に伴って国の内外から果物、缶詰、瓶詰などが豊富に入ってきたし、自宅での保存方法も工夫されるようになった。ブルームの台所をのぞいただけでも、胡椒、食卓塩、オリーブの実、ジャージー梨、白ポートワイン、ココア、特選紅茶、極上結晶固形砂糖、玉葱、クリーム、丁子のつぼみ、あばら肉ステーキ、それに腹がでてきたので晩酌に飲むのをやめようかとモリーの考えているスタウトなどがある。これらの品のうち、モリーの愛人の贈ってくれたジャージー梨と白ポートワイン以外は、近隣の店、あるいは市内の専門店や市場で仕入れたものである。

ジョイスのテキストに現れた料理とその調理法を解説した『料理のジョイス』によると、ブルームやモリーの思い浮かべる料理は200近くある。これはダブリンの中流階級の食卓が豊かになったことを示している。ジャガイモはアイルランドの歴史では忘れられない食物であるが、ミリーは手が荒れるためにその「お湯をこぼすことだってしようとしなさい」（18.1016-7）とモリーが愚痴るほどである。しかし

ながら、そのモリーでさえも、明日、ブラマンジュや黒すぐりのジャムをそえたタラ、それとも冷たい子牛肉とハムを混ぜたサンドイッチなどを食べようと思案している（18.940-50）。

## 衣 服

衣服については、一般的に男性は帽子、上着、ズボン、革靴で、女性は帽子、上着、スカート、革靴であった。男女ともに帽子を着用し、女性のスカートが長かったということを除くと、今日とほとんど同じである。ブルーム一家も変わりはない。ブルームは、普段、エデン河岸のメサイアス洋服店の仕立てのズボンをはき、シャツと上着、それにグレイト・ブランズウィック通りのプラストー商会で購入した山高帽をかぶっている。モリーの方はストッキング、ズロース、ブラウス、ベチコート、スカート、上着、麦藁帽子という身なりである。

服装は人々の社会的な地位の換喩である。外交員は相手に信用を与えなければならないだろうし、伊達男にはそれなりの身なりが必要であるし、「新しい女性」と呼ばれた人々は社会への挑戦の身振りを服装で表現した。帽子一つを取り上げて、どんな立場の人か、どんな想いを抱く人かわかる。ブルームの山高帽が一般人の表象であるならば、スティーヴンのラテン区帽はボヘミアンの印であるし、マリガンのパナマ帽は時代に敏感な若者の銜いである。またブルームが誕生日に娘にプレゼントするタモシャントーは父親の娘へのあどけなさの期待の現れであるし、ガーティ・マクダウェルという娘が被る麦藁帽は清楚の身振りである。

服装は流行にも左右される。特に顕著なのが子供服と婦人服で、流行はロンドンからダブリンへ、そして上から下へと伝播した。たとえば、子供服ではエドワード七世が少年のころに着たセイラー服が流行していた。英国海軍へ子供を入隊させたいと思う家庭が多かったのである。また年長の子にはイギリスの名門、イートン校の制服をまねたイートン服が着せられた。ジョイスの少年時代の写真にはセイラー服姿があるし、ブルームでさえ亡き息子のことを想いながら、「ルーディがもし生きていたら。成長する姿を眺めて。家のなかでその声が響き。イートン・スーツを着てモリーと並んで歩く」（6.75）とつぶやいている。いずれもイギリス志向の現れである。

しかし何よりも流行に敏感であったのは女性であった。ブルームが海辺で欲情する相手の若い娘、ガーティは、総督夫人らの服装に関する社交欄の記事を読み、ロンドンで発行されている『プリンセス読物』や『レイディズ・ピクトーリアル』といった週刊誌に気を配っている。週刊誌が欲望を喚起するということでは年配の女性も変わりはない。モリーが「びっちりしたコルセットがほしい」（18.446）と思うとき、彼女が念頭に置いているのはロンドンで木曜日に発行されている週刊誌、『ジェントルウーマン』である。こうした女性の消費活動の背景をなしているのは、商品文化の社会への浸透であり、それに伴う広告の隆盛である。人々の意識も物質中心の見方に支配され、女性はデパートのウィンドウに飾られ、広告で宣伝される商品のように自らを飾り立て相互に張り合い、男性はそれを購入しようとする消費者となる。

早くも1853年、メインストリートのオコネル通りに、クレアリー・デパートが開店した。パリのボ

ン・マルシェより早く、ロンドンのどのデパートよりも大きかった。大英帝国が産業革命の成果を世界に問うた世界万国博覧会から2年後のことである。大量生産の結果の安い品をたくさん展示し、博覧会の展示品を覗くような気晴らしを主婦に与えてくれた。そして銀座通りであるグラフトン通りには専門店がひしめいていた。ブルームがモリーにペチコーを買ってあげようと思うのは、この通りにあるブラウン・トマス絹織物店のウィンドウに心引かれたためである。

ちなみに、ダブリンでは半分の人々はもう半分の人々の着古しを着ていた。パトリック通りや競買場では古着が常時売られていたし、ブルームの家でもかつては古着を商っていたこともある。彼は市民の中間に位置しているらしく、玄関にかけてあるイニシアル入りの外套やレインコートも古着である。だが、モリーに不満があるとすれば、それは古着云々ではない。ブルームはモリーに下着を買い与えることに熱心であるが、彼女の一般的な衣服には無頓着であるためである。

### 家事／女中

家事の実際の担当者である女性の立場からの不満もある。たとえば、6月16日、モリーはベッドで朝食をすませた後、トランプ占いをしながらしばらくベッドを離れない。彼女の回想によると、玄関の雑誌を整理した以外、3時ころ化粧をし始め、4時過ぎに愛人を迎え、性行為の後、愛人と一緒に軽食をとり、夕には早くも寝入っている。一日の大半をベッドで過ごしていたことになる。だが、この日の彼女は特別で、普段はミリーの養育を含め彼女が家事一切を行ってきたのではなかろうか。それは「奴れいみたいにはたらかされて」(18.1079)という夫への不満だけでなく、ミリーが家を出た今も食材を「つい三人前買ってしまふ」(18.943)という独白にも明らかだ。

当時は機械化されておらず、炊事、洗濯、掃除など、家事は女性にとってかなりの重労働であった。モリーの愚痴は正当である。平均的な中流階級の家では召使を雇用するのが一般的であった。数名の召使を雇用する上層の家庭から、通いの雑役婦を雇用する下層まで様々であったが、召使の雇用いかに中流階級と労働者階級の相違となる。いわゆる「レイディ」と呼ばれる中流階級の女性たちの役割は、子供を生み、夫に仕事からの安らぎの空間を与えることであった。彼女たちにとって重要なのは、いかに「うまく家事を行なうか」ではなく、いかに「うまく召使を監督するか」であった。

I. M. ビートンの『ビートン夫人の家政読本』のような手引書も、数種類流布していた。子供のしつけから使用人の扱い方まで、主婦の理想や現実の生活にいたるまで詳しい助言がある。たとえば、ダブリンのフィンドレイターという雑貨店発行の『婦人たちの家政読本』では、午前6時半から午後10時までの一日の詳しいスケジュール、二週間サイクルの仕事の内容、さらに絨毯の大掃除などを含む一年サイクルの計画も説明されていた。仕事の内容を明示しておく召使にも余裕が生まれ、仕事に一層励むようになるといった配慮もある。

主従の間にはトラブルもあった。ブルーム一家も住み込みの女中を解雇したことがある。ブルームが妻の留守に女中に手を出そうとし、そのことで女中がつけあがり、ジャガイモや牡蠣など家の食物を持ち出し、あまつさえブルームが女中を「クリスマスにおなじテーブルで食べさせてくれないか」

(18.61-2) と言い出したことがあった。監督がうまくいかなかった例である。モリーは「あの女が出て行くかあたしが出て行くかどっちかです」(18.73) と夫に凄んだ。

召使は「階段上」の雇用者に対し、「階段下」の人と呼ばれていた。生活の場所が家の一番下になっていたからである。そして雇用者と召使との間には截然とした区別があり、召使との食事の同席をモリーが拒んだのもごく当然のことである。そもそも「階段下」にも階級があり、子供の世話役や小間使いから女中頭まで細かな区別もあった。階級のピラミッドは家庭にも持ち込まれていたのである。仕事も忙しく男性との交際の方は少なかった。ミルク売り、パン屋、肉屋、配達係、店主などが日常的に接する相手で、ブルームの隣家の女中が警察官と知合ったというのは偶然のことであろうし、ブルーム宅の「年収6ポンド、金曜日は外出日」(15.868-9) など好条件であった。

雇用は難しくなかった。新聞広告での募集の他、口コミや斡旋所の紹介もあった。女性の職業の約50パーセントまでもが召使という時代であったし、田舎にはその予備軍が多くいた。召使の約70パーセントがダブリン以外の出身であった。雇用条件もゆるやかで、読み書きも最低の知識しか問うこともなく、カトリックを召使の宗教と考えていたプロテスタント教徒の家庭も多かった。ただし、経験者の場合、前に働いていた家の「推薦状」をもらえるかどうか重要であった。それはブルームの家を解雇された女中が、前の家での立場を自慢して、「まっとうな推薦状もあるし」(15.868) と言っていることから明らかだ。

モリーは「女中なんかいないほうがまし」(18.71) と言いつつ、「いつかまたちゃんとした女中をやとえるようになるかしら」(18.1079-80) と矛盾したことを言う。一つの理由は夫と女中の関係についての心配であるが、内実は経済問題であるだろう。かつても、「年収6ポンド」という条件の他、食費や衣服などの貸与を含めその3~4倍の費用を要していたはずである。今のブルーム一家にはそんな余裕はないのではないか。現在、かろうじて安価な通いのミセス・フレミングを雇用しているに過ぎない。愚痴りたくもなる。

### モリーの不満

このようにブルーム一家の家庭をのぞくと、主婦であるモリーには色々と具体的な不満がくすぶっていることがわかる。夫の収入の慎ましさ、特に衣服や召使への不満など、彼女の大きな問題である。彼女がほとんどの時間を家庭で過ごしていることを考えれば、それもしごく当然である。彼女の名前は「ミセス・ブルーム」に過ぎない。愛人からの「ミセス・マリアン・ブルーム」(4.244) という彼女への手紙の宛名は異例で、夫が死亡した時にしか使用されない。

しかし、ダブリン全体の当時の状況からすると、モリーの不満など重大事ではない。もっと切実な問題を抱えた市民が多数いた。それでも家庭への不満が彼女を不義に駆り立てているとしたら、そこには根深い事情があるかもしれない。夫に隷従することからの自立の身振りなのか。それとも夫婦間の微妙な関係によるものか。ブルームとモリーの間には共通する思い出が多いが、すれ違いもあるし、敵対する事柄もあるだろう。

ブルームとモリーの結婚した 1888 年、両者の間には熱烈な感情があったが、今ではそれが冷却していると指摘する人もいる。第 18 挿話のモリーの独白に見られる「彼」は確かに様々な男性と交換可能のように使用されているし、そのかぎりでは、ブルームとボイランは同列である。だが、日常生活は情熱だけで動くものではないし、夫婦の生活も社会との関わりと無縁ではない。早急な結論は避け、二人を取り包む時代状況をしばらくながめることにしたい。

#### 参考文献

- Armstrong, Allison. *Joyce of Cooking: Food & Drink from James Joyce's Dublin*. New York: Station Hill Press, 1986.
- Beeton, Isabella. *Mrs Beeton's Book of Household Management*. rp. London: Chancellor Press, 1984.
- Bowen, Elizabeth. *Seven Winters: Memories of a Dublin Childhood*. London: Longman, 1942.
- Briggs, Asa. *Victorian Things*. London: Batsford, 1988.
- Daly, Mary E., and Mona Hearn, Peter Pearson. *Dublin's Victorian Houses*. Dublin: A. & A. Farmar, 1998.
- Dickinson, Page L. *The Dublin of Yesterday*. London: Methuen, 1929.
- Dunlevy, Mairead. *Dress in Ireland*. New York: Holmes & Meiser, 1988
- Farmar, Tony. *Ordinary Lives: The Private Worlds of Three Generations of Ireland's Professional Classes*. Dublin: A. & A. Farmer, 1999.
- Findlater's Ladies Housekeeping Book*. n.d.
- Granville, Gary. *Dublin 1913: A Divided City*. Dublin: Curriculum Development Unit, 1972
- Hardyment, Christina. *From Mangle to Microwave: The Mechanization of Household Work*. Cambridge: Polity Press, 1988.
- Hearn, Mona. *Below Stairs: Domestic Service Remembered in Dublin and Beyond 1800-1922*. Dublin: Lilliput Press, 1993.
- Igoe, Vivian. *James Joyce's Dublin Houses & Nora Barnacle's Galway*. London: Mandarin, 1990.
- Kennedy, Tom, ed. *Victorian Dublin*. Dublin: Albertine Kennedy with the Dublin Arts Festival, 1980.
- Kerr-Jarret, Andrew. *Life in the Victorian Age*. London: The Reader's Digest Association, 1996.
- O'Brien, Joseph V. *"Dear Dirty Dublin": A City in Distress*. Los Angeles: University of California Press, 1982.
- O'Reilly, Rev. Bernard. *The Mirror of True Womanhood: A Book for Instruction for Women in the World*. New York: Peter F. Collier, 1880
- Peer, C. S. *How To Keep House*. London: Archibald Constable & Co., 1902.
- Powell, G. R. *Dublin and Its Neighbourhood*, London: Ward, Lock, and Co., 1889.
- Prunty, Jacinta. *Dublin Slums, 1800-1925*. Dublin: Irish Academic Press, 1998.
- Smithson, Annie. *Myself and Others*. Dublin: Talbot Press, 1944.
- Wilson, Laura. *Daily Life in Victorian House*. London: Hamlyn, 1993.
- Rowntree, B. Seebohn. *Poverty: A Study of Town Life*. London: Macmillan, 1910.